

## 主の降誕(日中のミサ)の説教

金 大烈 神父 2009年12月25日(金)

《私たちは光の子 光の子らしい生き方を！》

今日の福音(ヨハネ 1・1 - 18)は、マタイ、ルカ、マルコの福音と少し違い、哲学的なおいがします。「初めに言<sup>ことば</sup>があった。」少し哲学的に聞こえますよね。哲学的に、イエス様の誕生、イエス様がこの世に来られた意味、来られたときにこの世はどのような反応を見せたかについて簡単に話されているみ言葉です。

このみ言葉の中心となる二つのポイントについて申し上げたいと思います。

一つは、この世が始まる前から神様とともに、言<sup>ことば</sup>という一人子がいました。それを私たちはイエス様と呼んでいます。イエス様は、「言<sup>ことば</sup>(み言葉)」と表現される存在でした。そして、その言(ことば)の中には命がありました。その命は光でした。その光は肉となってこの世の中に来られ、自分が創造した全てのものの前に現れました。しかし、この世の神様の民は認めませんでした。受け入れませんでした。けれども、「言<sup>ことば</sup>を受け入れた人、その名を信じる人々には神様の子となる資格を与えた。」と書かれています。

さあ、私たちは光の息子・娘達です。カトリック信者ならば、イエス・キリストを救い主として信じているのならば、光の中にとどまらなければなりません。簡単に言いますと、私たちが光の息子・娘達であるならば、『光の子らしい生き方をしなければならない』ということです。これが一番大事なメッセージです。「光の子」、「光の子」と言いながら、光ではなくて闇のやり方、闇の考え方、闇の振る舞いを見せてしまうならば、私たちは光からはずれてしまいます。私たちは、いつも光の子であることを意識しなければなりません。できるだけ頑張って、いろいろな誘惑に勝ち、光のうち、すなわちイエス・キリストのうちにとどまる姿を保たなければなりません。

けれども、私たちはいろいろな誘惑の中にいます。だから、時々、闇に負けます。それでも私たちは光の子であることを絶対に忘れてはいけません。「今は倒れて、転んでしまったけれど、光の子として光の中にとどまらなければ、私の命の意味がない。」という強い意識が必要です。それを今日の福音を通してイエス様がおっしゃっていると私は信じます。

二つ目のポイントです。私たちは光の子です。けれども、私たちが知らなくて無関心だったために、光の子なのに、光の世界ではなく、闇の中で生きている人々がたくさんいます。もし皆様が、光のうちにいるときにいつも幸せを感じられるならば、その人たちにも、「ここに来てほしい」と手を伸ばさなければならないと思います。それなのに、実際には闇の中でさまよっている人々がたくさんいるのではないのでしょうか。ある意味では、「光の子」と呼ばれる私たちでさえ、いろいろな誘惑に負けて、今も闇の中でさまよっているのかもしれない。

皆様、よく考えていただきたいのです。一人で救われるのでは、信仰ではありません。自分だけ救われるのも、み旨ではありません。み旨は、光であるイエス・キリストのみ言葉・愛を、知らない人々に述べ伝えることです。それによって、光の子がだんだん増えて行き、この世の中が、天国のリハーサル舞台のようにならなければなりません。

今日、赤ちゃんのイエス様が、私たちの前に素直で純粋な顔をしていらっしゃいます。その赤ん坊のイエス・キリストの前でもう一回考えてみましょう。

まず私自身が先に福音化されなければなりません。その次に、福音化された私が入りにこの喜びの頼りを伝えなければなりません。そのためには、仕方なく、犠牲を払わなければならないこともあるでしょう。自分を我慢しなければならぬこともあるでしょう。しかし、そのような心で、もう一回頑張ってみましょう。

皆様によって、ただ一言によって、救われる人がいるかもしれません。逆に、私たちの無関心によって、救いから離れてしまう人もいるかもしれません。本当に、重い意識が必要ではないかと思ってみました。

ありがとうございました。